
シアワセの唄

桜乃ゆめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シアワセの唄

【Nコード】

N9979H

【作者名】

桜乃ゆめ

【あらすじ】

某サイトで掲載している小説をBLにしてみました。主人公の名前をいじって……。内容殆ど一緒だから読んだ人はすぐわかると思います。え？ここはあらすじだ、って？あらすじなんてゆめが書けるわけじゃないですか。と、いうわけで、どうぞ先へお進み下さい。あらすじ書けない分本文頑張るんで！！よろしく願います！！

日常（前書き）

・注意・

ゆめの性格の歪み上、残酷な描写が出てきます。

そのお話では、前書きで注意しますので閲覧はご自分の責任で願います。

文句言われてもゆめは知りません。

以上！

桜乃ゆめ

日常

「……っ！ やめっ！！」

必死で押し返す俺の手をいとも簡単に捻りあげる。

「……つてえ！」

眼鏡の奥、瞳の中に見つけた、色。俺は恐怖する。まるで……。

お前に拒否権はない、

そう、言われているようで……。

「……ッ！」

全身の力を足に込め、身体の中心部にある男の弱点を膝で蹴る。

「ッ！！ くそが！」

降りかかる怒声と共に、バチンと頬を平手打ちされた。

痛くない。痛くないんだ。俺は痛みなんて感じちゃいけない。

痛みに耐える男を上手くすり抜け、俺は外に出た。

乱れた制服をある程度直し、息を吸い込む。辺りを見回して、簡単なルートを頭の中で検索する。

このルートなら、見つかる可能性は低いな。

迷わず俺は走り出す。

将来なんて考えたことねえ。

今が楽しけりゃそれでいい。

酒は飲んでもタバコは吸わねえ。

ミョーな所でポリシーがあるって言われる。

肩まで伸びた髪を揺らし、俺は走る。

この髪を俺は好いてる。顔すら覚えてねえ位ガキン頃に離婚した父さんと、唯一ハッキリ似てるとこだからだろうな。何でかってーと、人間の髪って、光の加減でちょっと色が変わるんだけど、俺はその変化がすっげー大きいんだ。

バカやろーッ！！

心で叫んでまだまだ走る。もう少し、もう少しで目的地だ。

「ははっ」

楽しいことなんて一つも無いのに笑いが漏れる。

「ははははははっ」

現在の時刻は午後十一時半。大声で笑えば勿論メーワクな時間。だけど、そんなこと関係ない。ここは港町。使われなくなった倉庫が立ち並んでいるだけだから、うるさいと怒鳴るオヤジなんて居やしねえ。一番奥の倉庫の前で、俺は漸く立ち止まる。

「今日はちよつと遅くなったな」

ポケットから取り出した携帯で時間を見て、それから錆びた鉄製の扉を押し開ける。

ぎぎィ……という独特の音はいつまで経っても慣れない。

「ちわーす！」

御志波唯都。おしばゆいと 高_二の夏の、日常だった。

日常（後書き）

初めまして、桜乃ゆめです。
ブログですよ！

いやあ、短いすねえ。

これで長いと思った方！

次から覚悟してくださいよ！

長々と書きますから。

自分でもうぜーと思うほどに。

まあ、投稿するまでにかなり時間かかるでしょうが……

それでも、おつきあいしてくださいさると嬉しいです。

贅沢言えば、アドバイスや感想なども送って下さるとうれし泣きします。

え、うざいとかいわないで！！

それでは、また……。

愛と夢をこめて、読んで下さり、ありがとうございました。

・桜乃ゆめ・

さしのべられた手

久々に学校に行こうと思って、俺はエナメルを肩に掛け、通学路を歩いていた。

それにしても、朝から俺が登校するなんて、エラくね？ 仲間に知られたら絶対笑われんな。おい、唯都、優等生のフリか？ って感じで。うわ、リアルに想像できる自分が怖い。

……にしても、朝っぱらからウゼエな。チラチラ見やがって。見るなら堂々としろ！ 俺は所構わず喧嘩ふっかけるような奴じゃねえんだけどな。ま、そんなもんコイツらにしたら同じか。同じ制服を同じように着た奴らを視界の端に捉える。あんたらには、俺らンことなんか一生かかっても解んねえよ。解る気なんてある奴の方が少ないだろーけど。

「ふあ……っく」

欠伸を噛み殺すと、目尻に涙が浮かんだ。泣いてるみたいだと、涙を拭った指先を見て、そう思った。

泣いた記憶は、小学校低学年以来、一度もない。

「うっそ、マジで!？」

「嘘じゃねーし、マジだから」

みつきー（担任）のくせして冷たい。ようし、可愛くお願いしてみよう。

「みつきーおねがい」

「……。い、や、だ。テメエの尻ぬぐいはテメエでしろ。俺を巻き込むな」

「そんな寂しーコト言わないでさア、俺の担任だろー？」

「キモい。とにかく、次のテストで全教科九十点以上取りやがれ、じゃなけりゃ退学だ。これは決定事項だからな」

「くっそー、絶対九十点以上取ってやるからな！ 今に見てろっ」

言うだけ言って、俺は職員室を飛び出した。みつきーが何か言っていたような気がするが、今はそれどころじゃない。

「残らなきゃなんねーんだ」

絶対。

「じゃなけりゃ、どうなるか……」

想像したくもない。それ以前に、結果が見えている。

ぱん、と手を合わせて頭を下げる。

「頼む、勉強教えてくれ！」

「あ……あの、私、じゅ、塾とかで忙しくて……む、無理だと思います。ごっ、ごめんなさいっ」

真っ青な顔をして、走り去って行ったクラスメイトの、女の子特有の小さな背中を見つめた。

「怖がなくても何もしねーっての……でもまあ、自業自得か」

ガリガリと頭を掻く。出席日数ギリギリしか学校行ってねえ、実質不登校の男子にいきなり勉強教えてくれて言われても困るよなあ。うん、俺が女だったとして、さっきのクラスメイトと同じ状況なら、逃げてるな。

「どーすっかなー」

「御志波くん……？ 珍しいですね、きみが学校に来るなんて」「んー？」

不意に聞こえた声に、振り返ると、目に留まったのは綺麗な金髪。そして藍色の瞳。えーと、見たことあんだけど……だめだ、思い出せねえ。

「悪ィ、あんた誰？ イマイチ覚えてねーみたいでさ」

「仕方ありませんよ、俺は影が薄いらしいですから。改めて、日下くさか部章弘べあきひろです。生徒会の、会計をやってます」

思い出した！ 入学式ん時、新入生代表の挨拶をしていた奴だ。確か、その挨拶をするのは成績優秀者の筈だ。俺がすっかり忘れてても怒らないし、いい奴みたいだ。頼みは断れなさそうな顔をしている。

「どうかしたんですか？」

黙り込んだ俺を深海の瞳が覗き込む。ようし、一か八かだ。頼んでみよう。

「あのさ……」

俺は日下部に、次のテストで全教科九十点以上取らなければ退学になること、そしてできれば勉強を教えて欲しいことを簡潔に伝えた。そうなんですか、と呟いて、悩むような仕草をしたあと、日下部はにっこりと優しい笑みを浮かべた。

「いいですよ、俺が教えます」

思った通りの人物のようだ。

「ほんとか？　ありがとなっ日下部」

抱きついて、俺より高い位置にある日下部の頬にちゅ、と軽い音をたててキスをする。意外に日下部の頬は柔らかく、キス心地が良かった。

「え、あ、ちょ……い、今、キス」

「ほっぺにか？　したよ。ちゅって」

それがどうかしたのか。今ドキキス位で狼狽える奴も珍しい。

「お、お、おと……男にキスされても、嬉しくないというか」

「唇じゃないし、別に気にする程のことでもないだろ」

そもそも俺はキス魔だ。ほっぺ位良いじゃないか。

「何細かいこと気にしてんだよ。良いじゃねーか、減るもんじゃねえし」

「何か大切なものが減る気がするんですが」

気持ちを落ち着かせるように目を閉じて深く息を吐いた。再び目

を開けた日下部は、もう狼狽えてなごいなくて、いつも通りなのかどうかは判らないけど、さっきの――生徒会会計をしていて、学年トップの日下部に戻っていた。

「……あまり堂々とキスしないでくださいよ、アメリカとかなら挨拶ですけど、ここは日本なんですから」

「へいへい」

優等生は厳しいようで。日本でもほっぺちゅーを挨拶にすればいいのに。あっちでちゅー、こっちでもちゅー……あー、それはそれでキモいな。

「それで、テスト勉強いつから始めるんですか？ 一応、テストは二週間後ですが」

「今日からでも始めねーと終わらないヨ？」

語尾にハート付けてやったら、日下部が盛大にため息をついた。失礼だな、もう。

「…………理由を聞いても？」

「りゅー？ ンなもんバカだからに決まってんだろ、自分の学力は自分が一番よく判ってる」

そして、何故ここまで落ちたのかも、解ってるんだ。解ってても、俺は何もできない。それは想像以上に悔しくて、惨めだった。それでも、こうする以外に手段はなかった、と思いたい。

「聞いてます？」

日下部の声で、思考は中断され、俺は藍の瞳を見上げた。

「悪い、聞いてなかった」

「どこで勉強するつもりなのか聞いたんです。近くの図書館でも良いんですが、五時には閉まってしまえますし」

待て待て。日下部クン、何時^{なんじ}まで勉強やらせるつもりだ？ 俺が知恵熱出すだろ。

「そうですね、家で勉強しましょう」

「俺^ちん家は駄目^ちだかな」

「御志波くんのご両親にご迷惑がかかってしまいますからね」

眉間にちよつと皺を寄せながら、内心ほつとしていた。詮索されるとまずいことになるからな。下手すれば、アイツの機嫌を損ねることになる。そうなったら俺だけじゃなく、日下部にも危害が及ぶ可能性が高くなる。無関係な人を、俺の問題に巻き込む訳にはいかねえ。

「俺の家でしましょう」

「いいのか？」

「はい」

爽やかで、優しい春のひだまりのような微笑み。きっと日下部は、愛を知ってる家庭で育ったんだろう。家族から愛されて育ったんだろう。それは、俺には解らないことだ。だけど、これだけは断言できる。日下部のような親を持った子供は幸せだ。たとえ、貧乏だとしても、幸せだろう。

「うん」

「どうかしたんですか？」

「ん？ いや、何でもない。じゃ、夜行くから」

ピラピラと手を振り、日下部に背を向け歩き出そうとしたところで、腕を捕まれた。もち、日下部に。

「あー、何？」

「何？ って……今から行くんですよ、俺の家に」

「え、何で」

「間に合わないからです。きみのことだから、今回のテストの範囲だけ説明しても解らないでしょう？」

ごもつともデス。

「あーあー。えっと……じゅ、授業はどうすんだ？」

「今は放課後です」

「うッ！ えーと、ほら、お前の両親……」

「独り暮らしです」

あつ！ 俺の言葉遮りやがった。くそう、日下部のくせに。

さしのべられた手（後書き）

やっと二話目投稿です。

ホントはもつと長いんですが、もともと読みにくい文章がもつと読みにくくなりそうだったので分割します。

新しくタイトル考えるのにすっごく唸ってました。

感想をくださった方に、この場を借りてお礼を言いたいと思います。ありがとうございました！

変な描写や誤字脱字、たくさんあると思います。

見つけたら、感想やらで知らせてください！

最後になりましたが、ここまで読んでくださった皆様！

ありがとうございますっ！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9979h/>

シアワセの唄

2010年10月10日06時33分発行